

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別取扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十四年六月二十五日印刷 昭和三十四年七月一日発行

第二十五卷

第七号



七月号



新刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土七月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

み魂を迎えて……………香月 乗光 (2)

お盆の祭り……………中村 康隆 (6)

盆風物詩……………編 集 部 (14)

赤 赫子さんのことなど……………村田 嘉久子 (10)

教阿弥陀仏入寂の地……………北村 謙順 (23)

——大耳四郎のこと——

インド紀行 仏陀の地(3)……………斎 藤 昭 俊 (32)

高僧伝 石井大宣……………大 橋 俊 雄 (22)

童 話 かぼちゃの花……………森 義 正 (28)

随 想 仔犬昇天……………安 藤 正 男 (31)

入信の機……………村 上 博 了 (35)

意 訳 「四誓偈」……………吉 田 定 久 (13)

浄 土 歌 壇……………岩 野 喜 久 代 (40)

本来なる自分……………須 藤 隆 仙 (17)

法然上人御一代記(四)

扉の御法語……………西方極楽世界……………(20)

童心仏心……………(16) 日本靈異記より……………(34)

真理の花たば……………佐 藤 良 智 (36)

——若き女性への仏教入門(四)——

浄土

七月号

一念十念に往生をすといへば
とて、念仏を疎想に申すは、信
が行をさまたぐるなり。念々不
捨者といへばとて、一念を不定
におもふは、行が信をさまたぐ
るなり。信をば一念にむまると
信じ、行をば一形にはげむべし。

法然上人御法語





み魂を迎えて

香 月 乗 光

—

数多い年中行事、仏教行事の中で、お盆ほど人の心を深くとらえるものはないでしょう。あのしっとりとおちついて、人々のなごみあう、何ともいえないふんいきが、先づ人の心をひかないではおきません。なき人のみ魂を迎えて、おまつりするその行事によって、平素は見られない人々の美しい真情が流れ出て、お互いの心がかよいあい。一つに結ばれるからでありましょう。平素はめいめいの仕事に忙しく、人々との間のはげしい生活に追われて、ゆっくりおちつくいとまもない私たちが、お盆には静かに心を休めて、人々とともに、同じく御先祖さまをおまつりするところに、おのずか自らお互いの心があたたかくふれあい、とけあうからでありましょう。

まことにお盆には忘れていた自己をとりもどし、ほんとうの自己に立ちかえたようなやすらかさを味わうことが出来るものです。これは平素の忙しさから解放されることにもよりましょうが、それにもまして、必ずや御先祖さまをお迎えして、おまつりをするということによるものであるうと思います。

御先祖さまをおまつりするということは、人間としての美しい真情の発露であります。私たちは父祖あつての私たちであり、父祖のめぐみによって、今ここに生を受けていることはいうまでもありません。ですから私たちの心の奥には、たとい平素は気づかなくとも、父祖を思う真情がいつも脈うっているのです。それは人間が今現に受けている生命の本源に対するうやまいの念であり、なつかし

みの情であります。たとい目には見えなくとも、御先祖さまと離れることの出来ない深いえにしにつながる私たちの、人間としての当然の心の動きであります。

御先祖さまを思う心奥の流れは、そのみ魂を迎えておまつりするお盆に当って、大きく高まり波うって、表面に溢れ出るのであります。この高まりの中に、私たちは御先祖さまと一つ流れの生命に生きる自己を見出し、その生命の本源にふれる自己を感じるのであります。まことにお盆は私たちがなき人々と一つ生命に結ばれる実感の中に、その生命に動かされていとなむ行事であります。そこにはその生命に生かされているものの、本来の動きとして、やむにやまれぬ心情があらわれているのであります。だからこそ何ともいえないゆかしさととなつかしさを覚え、ほんとうの自己に立ちかえったようなやすらかさを味うのであります。ここにお盆の行事が、人の心をとらえずにはおかかない更に大きな理由がひそんでいたのであります。

二

良寛さまの歌に

思ふまじ思ふまじとは思へども

思ひ出しては袖しぼるなり

とありますが、愛する者親しい人と死別して、思いあきら

めることの出来ない人間の悲哀が、いみじくも詠みあらわされています。愛別離苦と申しますように、私たちにとって愛する者親しい人と別れるほど、つらく悲しくやるせない事はありません。実に断ちがたいのは恩愛のきずなであり。忘れがたいのは先立った人の面影であります。命短かい無常のこの人生において、苦しみのたえることのないこの世において、僅かに恩愛の情をたよりとして思いあい助けあって生きている私たちにとって、それは誠に当然のことでありましょう。

お盆こそはこの人間の哀情が一つにあつまり強くあらわれて、今はなき愛する者親しい人をしのぶ切実を思いの中に、そのなつかしい忘れがたい面影が、新しくよみがえり、そのみ魂をお迎えするのであります。お盆には特にさまざまなならわしによって種々のいとなみをいたしますが、それらは何一つとしてこの「盆どころ」のあらわれでないものではありません。「迎え火」や「送り火」さては、「迎え団子」「送り団子」等、そのどれをとっても、なき人が今現にここにまします思いに住して、そのみ魂をまつる尊くもゆかしい人の心の美しさが見られます。

まざまざといいますが如くたままつり

季吟

魂柵の奥なつかしや親の顔

去来

かたみ子や母が来るとて手をたたく

一茶

迎火や父の面影母の顔

白雄

聖霊とまぎれ遊ぶや盆三日

吾仲

などという句は、いづれも皆この「盆ごろ」をいみじくも詠みあらわしているではありませんか。一家をあげてともどもにみ魂を迎えて過すお盆の三日間において、なき人との対面が何にもまして人の心を深くとらえるのです。

三

み魂をおまつりするのには、御先祖さまを敬いなつかしむ心によることは申すまでもありませんが、それはやがて自らを反省し、自らの姿を見つめる事になるのであります。

平素は自らを省みるいとまもない私たちが、静かに「たま棚」の前にぬかづき、合掌礼拝する時、おのずか自ら自己がとり

もどされてくるのであります。そのゆとりの中に、忘れられている現実の自己の姿が眺められるとともに、ほんとうの自己に思い至るのであります。なき父や母、先立った兄や妹、さては失った子どものことなどを想い起し、その面影を追って、なつかしさがこみあげ、新しい涙にむせぶところに、改めて世のはかなさ、人生のつらさを偲ぶ心が起って、却って自分の姿、心の奥底が感じられてくるのであります。

魂棚にこちら向く日を待身かな

支考

迎火や今に我等もあの通り

一茶

というような句は、お盆に際して感じとった自らの命のはかなさを詠んだものであります。なき人のみ魂を迎えて、つくづく想われるのは、世の無常であり、我が身のはかなさであります。そして我が命が短かく、世の中が苦しいだけに、御先祖さまを思う心もまた一しお深まりつるのであります。

御先祖さまを思い、なき人を偲ぶ心が、自らを感ずる心に立ちかえることは、御先祖さまと同じ生命につながる私たちが、その生命のよび声を聞くからであります。

その生命のよび声の中に、私たちは自らの内に流れ伝わる生命の高なる鼓動を聞き、自己が遠い御先祖さまからの尊い生命をうけついで、今ここに生きており、その深いめぐみによって、現に生かされていることを、はっきり思い知らされるからであります。そしてたとい世は無常であり、人生は苦しくとも、それだからこそつとめはげまなければならぬ自分であることに思い至るのであります。この自らを思う心の上にこそ、ほんとうに御先祖さまをおまつりするまごころが生れるのであります。ここに改めて報恩と感謝の思いをそそられ、自らを本来の姿において見なおして、

新しく努力と向上の念にかりたてられるのであります。

四

法然上人は「孝養の心をもてちちははをおもくしおもはん人はまづ阿弥陀ほとけにあづけまいらすべし」と仰せられて、或は現在の父母に親しくお念仏をすすめて信仰にみちびき、或はなくなつた父母にねんごろにお念仏をたむけて追善のまことをはこび、此の世もあの世も共に阿弥陀仏におまかせすることが、まことの孝養であると教えられています。

お念仏は自らの姿をかえりみて、そのはかなさにうちおどろき、自らの心をつめて、そのみにくさにうちふるえて、そのような救いがたい自己が、み仏の救いに預るありがたさにうちよろこび、み仏におすがりする心からのよび声であります。なき父母に対し、また御先祖さまに向い、お念仏を唱えて御回向申上げ、追孝のまことを捧げる時に、私たちはその魂の前に、心から自らのはかなさに気づかされ、みにくさを思い知らされて、み仏の救いにおすがりする心が湧き起って参ります。お盆というそのいとなみの中に、お念仏のありがたさが、しみじみと感受され、み仏の慈悲をよるこぶことが出来るのです。

このありがたさによるこびとは、更に現在の父母の上に

も、進んでは広く人々の間にも、そのままひろげられつたえられて行かなければなりません。お盆と前後して行われるお施餓鬼は、実にこの御先祖さまをおまつりする心がひろがって、有縁と無縁とを問わず、三界の万霊をひとしくおまつりする法要であります。父母を思う一念が、他の人々を思う心へ進み、先祖への思いが、社会への思いにひろがるのは、自然の動きであります。御先祖さまとのつながりの上に自己を見出したことから進んで、社会とのつながりの上に自己を見出し、社会の人々に生かされて生きていく自己を思い知る所に、このお施餓鬼が修せられる大きな意味があると思います。

お念仏を唱えてみ仏の慈悲につつまれる自己を知った時、私たちが御先祖さまをおまつりし、また広く有縁無縁の精霊をおまつりするその心も、更に高められて、まことのつながりの世界が開かれるのであります。お念仏の中に私がみ仏に結ばれるそのことを通じて、私と御先祖さまとのつながりも、私と人々とのつながりも、ますます強められ、いよいよ高められて行くのであります。これこそがまことの報恩感謝の道であり、その道からこそ、まことの人生が開かれ、生命の輝きが見られるものと信ずるのであります。

(仏教大学教授)

お盆の祭り



中村 康 隆

お盆に関する説話は数が多いが、今昔物語には次のような話がついている。

七月十五日、誰とも知れぬ極貧の女が、先祖のために食物を備えることが出来ず、著ている薄色の綾衣あやぎぬの表を解いて、瓷シ（磁器）の盆ハトギに入れ、蓮の葉で上を覆って、愛宕寺あたごでらにお詣りして、泣き伏して礼拝して去ったので、人々が不審に思ってみると、その蓮の葉に

「奉る蓮はちすの上の露ばかり

これを哀れに三世の仏に」

と書いてあったという。

この哀話が物語るように、お盆には種々の供物を盆ハトギや盆に盛って三宝に供える風が、昔からあった。こうした風は日本ばかりではない。支那にも印度にもあった。

それで、盂蘭盆経が支那に訳されてからも、盂蘭盆うらんぼんの盆を器物の名と混同した人も多かった許りか、日本の民俗学者もそうした祭りの固有の呼名だとしている。しかしなにも盂蘭盆うらんぼん会の流伝りうでんを否定することはないので、推古朝以来灌仏会かんぶつえと並び行われて来た大切な仏教儀規だから、盆はその略称と考えてよいだろう。

一体、亡くなつた人を偲び、そのみ魂を迎えて祭る「魂祭り」の習わしは、どこの国、いつの時代にも見られることである。殊にお盆のように、一年の中の或る時期を限って厚くこれを祭る習俗も広く見出される。欧州では十一月が「死者の月」なので、挙つてお墓参りにいくという。

印度でも毎月の新月祭をピンダ祖靈祭といつて、団子・団飯・供餅の類を祖先に供える祭りをした外、印度曆第六月黒分十三日より三日間（陰曆六月末）と第十二月最終日（陰曆正月十五日）との二回にマハーラヤと呼ぶ大祭を営んだものである。彼等にとって、先祖の祭りは子孫の義務であり、先祖への負債であつて、この祭りを怠つたり行わないと、祖靈はあの世で逆吊しの苦を受けると信じたのである。こうした俗信に対して、日蓮が母の苦を救つた故事因縁を説いて、夏安居最終日の懺悔滅罪の集いの日である自恣日の衆僧供養がそうした逆吊しの苦を救う道たとしたのが盂蘭盆経などの説であつて、いわば民間のマハーラヤ祖靈年祭に対して、旧七月十五日の僧院の自恣供養会を習合させたものといつてよい。

盂蘭盆は、つまり梵語のウランバナの音訳であつて、その原語は古来アバランバナ（倒懸、逆吊し）の転化した語とされ、救倒懸の意味とされているが、近來高楠博士はむしろウ

ランバナ（救済、済度）の訛つた語だろうとされている。

この盂蘭盆会が發展したのは、印度よりもむしろ中国や日本で、殊に日本で最も盛んになったといつてよい。というのは、中国や日本では、もともとそれが祖先のみ魂を迎えて行ふ大切な秋の収穫祭であり、また稲の成熟祈願祭だったからでもある。

このことはお盆の祭りを細かく観察すればよく分ることである。そこには古い農耕儀礼と祖靈大祭の要素が、仏教の儀軌と結びついて、行われている。

盆なりとむしりけるかな塚の草

（句空）

心にて顔に向ふや魂祭り

（鬼貫）

お盆が魂祭りを外にしてないことはいうまでもない。魂祭りといえは盆、盆といえは魂祭りであるとさえされている。しかしみ魂祭りの月はあえて七月に限らない。正月祭りが年神祭りに変つてからも、暮に魂祭るわざは久しく文筆に語られていたことであるし、今も魂棚をしつらえたりみ魂の飯を供える所も見られる。

春秋の彼岸なども明らかに先祖祭りの時期で秋田地方など

盆の迎え火送り火の行事を彼岸にも行っている。

かように時にふれ折にふれて先祖のみ魂は子孫の家里を訪れて末永く見守りたもうのだとの信仰を、我が国民は持つていたのである。それが仏教の盂蘭盆会と結びついて、就中年間最大の先祖祭りの行事となった訳である。

お盆の祭りは一日に始まる。釜蓋朝日、釜の口あき、釜蓋あき、閻魔の口あけ、石の戸などという。安房では亡者の旅立ちする日という。丹後中郡でドンボ朝日というのはこの頃から精霊トンボが出始めるからであろう。もとは寺でもこの日に施餓鬼旗を立てた。新盆の家でも燈籠立てといって親戚や近隣の者が集って庭前に燈籠竿（盆柱、燈籠木竿）を立てる所も多かった。この高燈籠は盆の月中立てたもので、つまり盆は正月同様一月間の大祭だった訳である。土佐で六月晦日をトボシゾメ、七月晦日をトボシアゲとしたのも、東北のマツ焚きが一日から月中行われたのもその意味である。此の日に盆路作りといって精霊迎えのための墓路山路の草刈りをする所もある。

七夕も今は星祭りと想われているが、これは上弦の半月祭で、此の日を七日目、七日益といって盆始めとする所も多く、一に磨き盆といって墓掃除や仏具磨きをした日である。

秋田を初めこの日に迎え火を焚く所も多い。所謂眠流し行事（ネプト、ネブタとも）も、実は本祭りの前の禊祓の習俗だった。十一日を信州で花取日とするのはみ魂の依代の盆花迎えの日だから、町では十二三日頃盆市花市を開いたのが今の植木市となった。

十三日から十六日までは盆棚・精霊棚を飾って仏事供養、祖霊祭をする。それが同時に農耕の祭りだったことは、棚の飾りつけや供物でも明らかである。稲や粟の初穂を飾り、時の野菜や果物、麺類などを供え、贈り物にも麺類が主に用いられる。水の子、水の実といって蓮や芋の葉に胡瓜や茄子を細かく刻んで洗米をまぜて盛ったのを魂棚や墓前に供える。これらはみな麦作畑作の収穫感謝祭であり、また稲粟等の成熟祈願祭でもあったことを示している。胡瓜や茄子の牛馬も実は農耕儀礼の姿を表わすもので、霊がこれに乗って来てこれに乗って帰るというのは、俗の解釈に過ぎない。

伊豆や清水などの地方で、十五日はお精霊さまが帰る日で朝早くシラミのカワを買いにゆくといつて、早朝に団子や団飯を作り、牛馬を出立ちの向きにし背中に小銭を紙に包んで小遣いだと乗せてやるが、実は此の日こそ最も大切な祭日としてシラミ（精白米？ または素煮？）の粥（つまりシトギ）を作って上げ、賽銭を供えた名残りといつてよい。

無縁仏や新盆の霊も特にお祭りをしたもので、そのための棚も別に設けたりした。施餓鬼会も元来はこうした新亡無縁の霊の宥和をするために盆と結びついて来たようである。

こうして十五日夕には送り火を焚き、十六日には燈籠流し、棚流しをして送るが、これで盆行事が終えたのではない。

二十日盆をウラ（末の）盆として青森の三戸郡では人形焼きをして祓をした。越後では二十七日を裏盆と呼ぶ所もある。一般には下弦の半月祭があとの祭日だったので、今も送

り盆、終い盆と呼ぶ所もあるが、所謂地蔵様の齋日として地蔵盆が広く行われている。

この外、中元とか盆釜その他語るべき行事は多いが、古来のこうした習俗が仏教の盂蘭盆会によって彩色されて人情の美しい絵姿を織りなしていることを感謝したい。

盆柵の奥なつかしや親の顔

（去来）

仏教ものしり帳

不動明王

仏様や菩薩様が柔和なの
に対して不動様やえんま大

阿闍如来 → 降三世明王
宝生如来 → 軍荼利明王
阿弥陀如来 → 大威徳明王
不空成就如来 → 金剛夜叉

ら救い出すのに使い、火焰は一切の煩惱を焼き払う大悲の徳相といわれる。

こうした恐ろしい姿の下には、あくまでも衆生を救いとうというやさしい心がかくされているのであるが、大体に於いて不動信仰

王はおそろしい。それは仏菩薩が慈悲の面をあらわすのに対して、その怒った姿をあらわしたのが明王で、五明王といって、それぞれ仏の化身ともいわれる。

大日如来 → 不動明王

不動明王は青黒い忿怒の面貌で、右手に降魔の利剣、左手に絹索を持ち、赤褐色の袈裟を着て、盤石の上に坐し、全身火焰におおわれている。忿怒の相は悪魔降伏の姿を示し、利剣は三毒（いかりとむさぼりとおろかさ）の煩惱を切り払い、絹索は衆生を迷いの道から白の地名はこれから由来した。

森赫子さんのことなど

村田 嘉久子

今年の三月から四月へかけては釈尊二千五百年記念の祝典があちこちで盛んに行われましたが、また同時に我が浄土宗でも教学院創立十五周年のお祝いが盛んに行われました。その催しの一つとして、四月二十日は昼銀座の山葉ホールでの講演会を、夜は学士会館で祝典記念晩餐会が催されましたが、この講演会に森赫子さんに何か体験を語る、というような講演をおたのみして呉れと、法然上人鑽仰会「浄土」の竹中信常氏に御依頼を受けました。

処で、私は非常に不安だったのです。それは赫子さんは以前から自分は無宗教主義だから、とよく言っておられたし、またお眼が悪くなられてから一層、神とか仏とかへ祈る、というような弱々しい気持は嫌いだ、とも云っておられたので、こうした式典での講演は気持よく引受けて下さらないのではないかと、私は非常

に心配だったのです。処が手紙で御願ひしたりまた竹中氏も直接訪問して頼んで下ったりしましたら、と案に相違してころよく引受けて下さったので、関係者一同がホツとしたというわけでした。

さて当日は折あしく雨が降り出して、いくら車とは云え眼の不自由な人にはうっとしい事でしょうと心配していましたが、楽屋で久々で遇った赫子さんは実に明るく、朗らかで非常に楽しそうにしておられたので、私までとても嬉しくなりました。

一時半、演壇えんだんに立たれてからも実に和んだ調子で話を始められました。が内容も誠に宜いお話で、ごく自然に体験を語られる態度を見ていて誠に胸を打たれました。

その中でも或る宴会に招よばれた時のお話で、御料理が出てそれが何んであるか、どんなものであるかが



よく解らないのには一番閉口した、という処や、誰れも人は随いていないので仕方なくお料理を食べるのにホークやナイフを持って失敗したらかえって耻を搔くだろうから、いっそ手ずかみの方が同じ笑われるのなからその方がよい、と思い切って手でつかんで口へ持つて行った。四方の人達の様子がちよつと変に感じられたけれど、もうどうせ手でつかんでしまったんだから、とそのままむしやむしや食べてしまったが、後で聞いたら、それが丁度鳥料理であつたので、鳥は手で食べるものですよ、と傍の人が、その場をつくらつてくれたので、やつとホツとした。というふうなお話の処は、聴衆も感動して微かな笑い声が聞えていましたが、私など笑いながら、しかし何か眼頭が熱くなるような氣持になりました。

そんなわけで非常にこの赫子さんの講演は評判がよく、私も依頼者として非常に嬉しくなつたのと、これは私の一人だけの考えですが、赫子さんも此日の講演は非常に楽しく、氣持よくなされたのではないかと思ひました。

それは無宗教だとか、そうした事柄にこだわるのは嫌だ、とか言っておられたけれど、こうしてこの日、

浄土宗の教学院十五周年の式典にここでお話をされて皆さんから喜ばれると云う事はきつと御自分でも何か氣持のよい、何か楽しい事なのではないかと、私には考えられました。み仏との因縁と申しますか、考えようによっては赫子さん自身も救われるのではないでしようかというような氣さえ致しました。ともかく夜の晩餐会でもその事で持切りで赫子さんの評判は大したものでした。

長く戦地に居た私の弟がよく話すことですが、兵隊さんの戦傷の間で何が氣の毒と言つて俄盲にわかめくらほど氣の毒なものはない、と自分の部下の人達でも眼をやられた人には一倍同情して居りました。私は自分が強い近眼でいつも不自由しているだけに、見えなくなった人には本当に心から同情しますが、赫子さんはそうした同情をされるのが大嫌い、またたしかに眼が不自由になられてから一層明るい感じになりました。其の点は私はいつも敬服して居ります。これには私達も非常に教えられる処があると思ひます。

私はテレビで開き盲めくらの役をした事がありますが、更に苦しかった経験があります。

それは一点を見詰めて眼を動かさずにいるのですが



近眼ではあつても全々見えないのではありませんから、セリフを言いながらもどうしてもそこを見廻してしまします。ことに相手が喋べっている時には、その方を見てはいけけないので、さればと言って耳だけかしげ、聞く芝居などすると、つんぼの人のように見えますのでそこが中々むづかしく困った事があります。

テレビと申せば近頃は映画の俳優さん達の都合もあつて、深夜にビデオテープで撮る事が多くなり、年の加減か私などまるまる徹夜をさせられますと、実に疲れて、頭がフラフラになって、折角覚えていたセリフまで肝心の本番になって忘れたりして、大失敗をやるのですが、先夜も相手の俳優さんが、火鉢の角の処などえセリフを書いたり、灰の中へ大事なキッカケを書いて置いたりしたのを、私は眼が悪いので知らずに灰をならしてしまつたり、消してしまつたりして大いに恨まれました。そして、そんな時には眼の良い人はうらやましいなア、としみじみ思つたものでした。

昨年十二月六日、赤坂のKRテレビの側に知人の家があつて、これがKRの坂から昇って行くと大変なので、裏の方から石段を二十段昇つてその家へ行ったのですが、その帰えり、上から五六段の処から真逆様に

ころげ落ちた事がありました。これなども夕暮れの薄暗い時でしたのと、石の段に何か木のようなものか石ころのようなものでもあつたものか、それに草履がすべつてもろに落ちてしまつたのです。その石段の下の向うにはもう一つ谷のような低い処があるので、はずみでその崖からころがり落ちてもしたら即死でしたが、なんと奇蹟的に、丁度その下の細い坂道を男の人が通りかかり、その人の上へ私の体がころがつて行つたので、その人が両手で抱き止めて下すつて助かりました。これも私の体重が十貫たいじゅう以下というので抱止めて貰えたのですが、もし肥っていたらその見知らぬ人と共にもう一つ先の崖から谷へ一しょに転がり落ちて心中する処でした。

私は今もつてこれはたしかにみ仏に抱止められたのだ、と信じて居ります。

「名号は是れ万徳の帰する処なり……」とかつて教わつた通り、み仏が「随逐影護したまう」のであつたのでしようと身にしみて有難く感じて居ります。それから後はいつどんな時でも、み仏に守られているのだ。という強い信念があつて恐い事はなくなりました。本当に有難い事だと存じて居ります。

「四 誓 偈」

1 もし我^{われ}世界^{せかい}に

上^{うへ}もなき、

高^{たか}き誓^{ちか}いを

満^みたさずば、

すぐれし仏^{ぶつ}と

言^いわれまじ。

4 もし我^{われ}ちえも

行^{ぎやう}もなく、

迷^{まよ}いの愛^{あい}を

喜^{よろこ}ばし、

すぐれし仏^{ぶつ}と

言^いわれまじ。

7 清^{きよ}き福^{ふく}をば

集^{あつ}め得^えて、

ちから十^{じふ}方に

わたる時^{とき}、

天^{てん}の光^{くわう}は

影^{かげ}を消^けす。

10 世^よ自在^{じざい}王^{わう}の

智^ちえこそは、

障^{さう}りとてなし

この故^{ゆゑ}に、

我^{われ}も等^らしく

あらんとす。

2 もし我^{われ}貧^みしき

人^{ひと}々^々を、

財^{たから}と法^{のり}とに

救^{すく}わずば、

すぐれし仏^{ぶつ}と

言^いわれまじ。

5 仏^{ぶつ}の光^{くわう}り

普^ふくも、

貧^みり怒^{いか}り

愚^ぐちを消^けし、

多^{おほ}くの厄^{やく}難^{なん}

払^{はら}うなり。

8 世^よのもろ人^{ひと}に

法^{ほふ}の藏^{ざう}、

開^{ひら}いて功^{こう}徳^{とく}の

宝^{たから}をば

施^せし説^{せつ}かん

常^{じやう}によく。

11 もし我^{われ}誓^{ちか}いを

就^{すなは}げ得^えなば、

世^よは皆^{みな}ふるい

天^{てん}人^{にん}は、

賛^{たた}えて花^{はな}を

降^{くだ}しませ。

3 もし我^{われ}誓^{ちか}いの

そ^{その}の名^な聲^{こゑ}、

早^{はや}く十^{じふ}方に

聞^{きこ}えずば、

すぐれし仏^{ぶつ}と

言^いわれまじ。

6 智^ちえの眼^{まなこ}に

もろ人^{ひと}の、

けわしき道^{みち}を

閉^とじふさぎ、

安^{やす}けき国^{くに}に

向^{むか}かわしむ。

9 すべての仏^{ぶつ}を

敬^{うやまつ}いて

誓^{ちか}いと行^{ぎやう}に

徳^{とく}を積^{たか}み、

世^よ界^{かい}の王^{わう}と

成^{なり}りませる、

12 花^{はな}は降^{くだ}り布^ふき

地^ちは揺^ゆぎ、

空^{そら}には音^{おん}楽^{がく}

香^かかおり、

まさに仏^{ぶつ}に

成^{なり}るべしと。

盆風物詩



編 集 部

年（一二一五）七月五日示寂した。

大阪四天王寺の末寺に勝鬘院というのがあ

って、かつて聖徳太子が勝鬘經を講ぜられた地とされる。ここの本尊が愛染明王。愛染即ちアイゾメの義から染屋、色町の人々の信心をうけ、七月一日、勝鬘参りとて、かつては可成り賑わったとのことである。

五日は臨濟宗の開祖栄西禪師の忌日である。崇徳天皇永治元年（一一四一年）四月二十日備中国、今日の岡山県の吉備津に生れた。俗姓賀陽庄といい、号を明庵と称し、葉上房とも呼ばれた。幼少にして才智拔群、八才の時俱舍論の頌を読み、十一歳で出家。後比叡山に登り顯密両教を修学した。六条天皇

の仁安三年四月法を求めて入宋（中国に渡

航）臨濟宗黄龍派の虚庵懷敏禪師に師事し、臨濟宗脉を継承し、宋の地で有名となり四明郡主より千光の号を贈られた。留学五年の後建久二年の夏帰朝、直ちに禪規を作り、禪寺を開こうとしたが叡山の衆僧の反対するところとなった。しかし彼の教えは漸次武家の間にひろまり、建仁寺に天台・密教・禪の三道場を設け、「興禪護国論」を著わし禪風を高揚すると同時に、茶道と禪との一致を説いて「喫茶養生記」を著わしたことは有名である。迫害や圧伏を何度となく受けたが、敢然として所信をまげず、日本禪宗の高唱につとめ、達磨禪の正系を伝え、順徳天皇の建保三

年（一二一五）七月五日示寂した。

浄土宗の列祖は法然上人を宗祖に、鎮西上人が二祖であり、三祖は良忠上人で、然阿と号し、伏見天皇から記主禪師とおくり名された。土御門天皇正治元年（一一九九）七月二十七日石州三隅荘に生れ、父は京極円尊という。十三歳にして出雲の鰐淵寺に入り、十六歳出家得度す。各宗の諸師を歴訪して天台・密教・律・華嚴等を学ぶ。貞永元年三月、三十四歳にして遊歴を止め帰国して多陀寺に住して、学道浄業につとめる。嘉禎二年三十八歳の時生仏法師が訪れて来、すすめられて九州に渡り鎮西に聖光房（二祖）をたずね入門す。一年間その膝下に留まり宗義を相承して帰る。爾来十年間中国地方を布教し、次いで東海、関東各地を教化す。鎌倉に入り現在の材木座、光明寺に住し著述に専念し、宗義の大系をととのえ、大いに念仏の教えを弘めた。建治二年京都にのぼり十一年間止まったが、弘安九年鎌倉に帰り、十年七月六日病を以て寂す。

七夕は、天の河の兩岸に分れて住む牽牛と織女の二星が相会う日を祭る行事。この二星はもと夫婦であつたが、帝釈（北極星）の怒りにふれて別居を命ぜられ、一年に一度、七月七日の夜だけ会うことが許された。この夜、かささが翼をひろげて天の河に橋となり、織女星がそれを渡って行くのだが、もし雨が一滴でも降れば、天の河に水が溢れて渡れないという。

この伝説が行事化されたのは、中国の唐の時代以前で、日本に伝えられたのも古く。天平勝宝七年（七五五）のことといわれる。宮中でも重要な節会とされ、一般の間でも夜賑かに祭られ、遊樂が行われた。徳川時代になつて五節句の一つとされ、諸大名総登域して参賀が行われた。儀式は色々に行われたが、一般には笹竹二本を立て、横に竹を渡し、これに五色の色をかけ、笹には五色の短冊紙をつける。その前に机を置き、香炉・燈明・花瓶・神酒・琴・笛・爪・梶葉・針・糸巻等を供え、鹽に梶の葉を浮べる。これ等のものは翌日川に流す。機織・裁縫が上手になるようとの願いを表わす。

近年ではこれが商業主義に利用され、中元売出しの装飾に用いられ、町の目貫き通りに巨大な飾りをつける風習が出て来た。

七月十日を四万六千日という。この日仏菩薩に参詣すれば、平素の四万六千日参る功德に相当すると伝えられ、東京では浅草寺、京都では清水寺や愛宕山が有名である。浅草寺では境内で「ほおづき」を売るので「ほおづき市」とも呼ばれる。また唐黍をも売り、これは雷除けの呪いとされる。

うら盆会は七月十三日から十六日にかけての行事である。梵語のウランバーナの音写でさかさに吊り下げられる苦しみの意で、このような苦しみを救うための法会である。

釈尊の十大弟子の一人大目犍連（目蓮）は神通第一で、天眼通を以って亡った父母をみると、母は死して餓鬼道におち痛苦をうけている。驚いてこれに飯を供したが、火焰に変わじて食べることが出来ない。目蓮は泣いて釈尊に訴えたところ、釈尊は「汝の孝順の至誠も母の重罪を救いがたし、すべからく十方衆

僧威神の力によって解脱せしむべし」といつて、七月十五日自恣の日（夏安居が終つて自由にさんげする日）に、百味の飯食を衆僧に供養すれば七世の父母及び現在の父母の危難にあるものを救うことが出来ると教えられた。目蓮は教えの通りにして、母の苦を救うことが出来、この法を以て未来世一切の孝順の者のために残そうとした。

以上がうら盆の起源であつて、中国においては武帝が大同四年（五三八）自らこれを行った記録がある。先亡供養の法会であつた。

我国にては仏教渡来五十五年の推古天皇十四年（六〇六）大和元興寺にて行われ、その後五十一年斎明天皇三年に飛鳥寺において須弥山をかたどつて行われた。この法要は日本の祖先崇拜と密接に結びつき、今日では仏教行事中最大のものとなった。

十三日の夜門口でヲガラを焚いて魂を迎える迎え火、菩提寺から僧侶が訪れて読経する柵経。十六日の朝ヲガラを焚いて精霊を送る送り火。十六日の夜、供物をムギワラの船にのせて川に流す精霊流し、そのほか墓参、施餓鬼、盆踊りなどの仏教行事が行われる。

盆行事の一つで、目に美しいのは流燈会である。盆に因んで精霊追善のため、水上に燈籠を浮べて流すのである。古来、台湾で盛んに行われたもので、我国では宇治の万福等で、陰曆七月十六日に行われる燈籠流しが著名で、二艘の舟に燈籠を積んで、宇治橋の下で読経の後三百六十の燈籠に火をつけて水に流す。燈籠は白紙蓮華形で、その灯の水に映って流れ行くさまは、まことに美しいものであったが、今は行われない。

盆の十六日は年期奉公の昔にはヤブ入りの楽しい日。地獄の釜もこの日丈けは休む。エソマ様もこの日丈けはニコニコ顔。各地のエソマ堂は参詣に眠う。

東京タワーが出来てメッキリ眠かになった三縁山増上寺の開基大蓮社西誉聖聰上人の忌日は七月十八日。上人は貞治五年（一三六六）千葉城に千葉氏胤の子として生る。二十歳にして聖岡の門に入り九年を経て明徳四年宗義を相伝して、武蔵貝塚に一寺を開く。これが増上寺である。永享十二年（一四四〇）

(童)(心)(仏)(心)

家のうちそと

ちようちよの子が二ひき。夜ふけの街灯の下で遊んでいました。

そこへ、はたるの夜番が来て言いました。

「早く家に帰りなよ。こんなおそくまで遊んでいてはいけないよ。」
すると、ちようちよの子が答えました。

「だって、家に帰ったって、おとうさんやおかさんが、いそがしがって、ちっともぼくと遊んでくれないもの。つまらないや。」
「ぼくんちではね。おとうさんと、おかあさんが、いつもけんかばかりしているんだから、家になんかいたくないや。」
二ひきは、顔を見あわせて、同情しあうにうなずきました。

はたるの夜番は、こまったように、おしりの光をにぶくして、だまって、ちようちよからはれなました。

（よい子を作る前に、まず、よい親を作らなければいけない。）と、ひとりごとを言いながら。
(桐)

七十五歳で入滅す。

俗に地藏盆とよばれる地藏祭は陰曆七月二十四日に行われる。京都では洛外にある六ヶ

所の地藏に詣でる。賀茂、深泥池、山科、鳥羽、桂、太奏で、一めぐり十四里行程である。なお、各地でもこの日は地藏を祭り、紅

提灯を吊し、鯨・芋・鬼灯を供え、余興などを催して一日を楽しくすごす。今日では農村の子供達の行事として行われる。

×

×

×

×

本来なる自分

須藤隆仙



本来なる自分

土佐配流となった上人は、実は讃岐（香川県）に着かれたのであった。これは兼実公が土佐では余りにも遠すぎる、せめて自分の旧領讃岐に、といって奔走した結果である。

途中上人は、多くの人達を教化され、讃岐に着かれてからも沢山の人達に念仏の尊さを教えたのであった。

中でも途中の教化で特に有名なものを上げると播磨（兵庫県）の高砂の浦の漁師の老夫婦と、同国室の泊の遊女とがある。

漁師の老夫婦は「自分達は永い間生きものを殺して生活してきたものである。この罪によつて地獄におちるのではないか」と泣き質してきたのである。上人は「如来の大慈悲はどんな悪人でもお救い下さる。あなた達も唯南無アミダ仏、と助け給えのお念仏を称えなさい」と懇ろに諭されたのであった。以来この老夫婦は歓喜勇躍の念仏行者になったという。

又、室の泊の遊女は、船で上人の乗っている船を追つて来、そして説法を聞いたのであ

った。

娼婦という身の賤しさ、しかもそうなっている宿業の悲しさ。女はさめざめと泣いたことである。

「罪深いことと思えば、この罪によつて先での酬いも又一層恐しいものとなるであらう。もし本の些細なことでもよいから、他に生計を立てる道があったら、直ちにこの道は止めるべきである。もしどうしても外に道がなく、生きるためには、外にどうすることもできないのであるならば、ただそのまま念仏を称えてくれ。阿弥陀如来はそのような罪を重ねなければ生きていけない人間のためにこそ「救いの願」を立てられたのである。卑下することなく唯称えてくれ。必ず救われるであらう」

上人はこう説いたのであった。

女は遊女を止めて、念仏の中に喜びの生活を見出していったのである。

流罪になつてわずか十ヶ月、同じ年の中に年号は建永から承元と変つたが、その承元年十二月八日勅免の宣旨は下つたのであった。流罪中懸命に赦免の運動を続けた兼実公

は四月五日に亡くなってしまうていたのである。だが公の遺言等が功を奏し、又上皇自身も感ずるところあつて、赦免は行れたのである。だが京に入つてはいけないという条件づきであつたため、摂津（大阪府）の勝尾寺に四年逗留され、その間この寺に一切経を寄贈されるなど、奏然自若たる生活であつた。

柴の戸に、明けくれかかる白雲を

いつむらさきの 色に見なさん
こう歌われたのもこの寺であつた。

建暦元年、後鳥羽上皇は不思議の神諭や靈夢により、上人を京へお迎えすることを決意されたのであつた。

十一月十七日その宣旨あり、二十日いよいよ上人は京の地をふまれたのである。

門弟その他の喜びは想像を絶したことである。京を離れて五年、七十九の御老齢に、上人は再び京の地の上人となられたのである。大谷に落着かれた上人のうえは、念仏を喜ぶ善男善女、袖を連ねたのであつた。

思うに上人の教えは、本来の自分に目覚める、ということに基づいたものであつた。

漁師老夫婦への教えにしても、遊女への教

化にしても、又は御自身の法難にしても、唯本来なる自分に目覚めて、そしてその上に念仏の信を打立てていく、これ以外になつたのである。「本来なる自分」、この徹底した実存の中から生れ出たものこそ、もっとも強大なるものだったのである。

宇宙は燦然と

京に帰られた上人は翌建暦二年、御年八十歳を迎えられ急に御体に衰弱が目に見出してきた。正月早々の二日から食事も進まなくなつたのである。ただ三四年前から目がうすく、耳が遠くなりかけていたのであるが、この頃になると逆に目や耳がはっきりし出してきたのは不思議であつた。念仏だけは一層はげしく申された。眠ておられる時さえ唇は絶えず動いていた。

十一日、とりわけ念仏の声は大きく、如来様がお迎えにこられた、と空を指さされた。周囲の弟子達には見えなかつた。

「ここ十年ばかり前から、如来様の真のお相を拝することが何度かあつたが、人にはいわからなかつたのである。今はもうこれで最後であ

るからいつでもよいであろう」

上人はこう仰せられて、弟子達が用意した五色の糸は手にされなかつた。又仏像を安置されたが、それも拝まれなかつた。もっともである。上人には真の如来様が迎えに来ておられたのである。仮りのお相や、形式的儀式はもはや必要なかつたのである。

二十日には空に紫の雲がかかつた。

二十三日には弟子勢観房源智に筆をとらせ「一枚起請文」を遺されたのである。

これこそ最も大切な浄土宗の要諦となるものであつた。「本来なる愚痴愚鈍の凡夫に還つて念仏称えよ」とう記されたものであつた。

二十五日、念仏の声はますます高かつた。慈覚大師が着されたと伝えられる九条の袈裟を身にまとわれた。

頭北面西、「如来の光明は、遍く十方の世界を照し、念仏の衆生を攝取して捨てたまわす」こう称えられて息はとだえた。微かに唇だけが十返ばかり動いたのが最後であつた。ねむるが如くに。

建暦二年正月二十五日、時正に正午、御年八十歳、釈尊の御入滅と同じ御年であつた。

巨星地に墮つ。されど法光は大地を揺がした。宇宙は燦然と、宇宙は燦然と、大いなる震動をともしない、大極楽の境地は開かれたのである。

歴代の天皇方が多く謚号を贈られている。円光・東漸・慧成・弘覚・慈教・明照等の大師号である。これ程多くの謚号（おくり名）を頂いたのも、我が国仏教史中、独り上人のみであった。

「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺蹟は諸州に遍満すべし。（中略）

念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、皆これ予が遺蹟なるべし（遺蹟を限定すれば、念仏の教えもその場所に限定されるではないか。念仏を弘むのが一生をかけての自分の仕事だったのであるから、念仏の声する所は、いかなる所でも皆自分の遺蹟である）

これが上人の最後の言葉であった。

弟子法蓮房が遺蹟をどこに定めるか、と尋ねた時の御言葉である。

人間は、仏様の完全なるお相の前に立たさ

れた時、皆悉く、か弱い、罪だらけの、愚かな凡夫である。この凡夫が仏様のお慈悲を信じ、それを頼って、いくらかでもその仏様に近づいていく。そしてやがては仏様と一体となってしまう。ここに調和と均衡とを見い出して、その『調和』と『均衡』とを中心として生活していく。それが南ムアミダ仏の念仏の生活である。

上人はこう仰せられて、絶対生活への尊さを、広く人類の上に開き給われた。偉大なるお方だったのである。

（完）

附言

鑽仰会からの御下命で、上人の御伝を教義をふくめてということとで筆をとってみました。愚凡返って上人の御徳を疵つけるところ多かろうと恐懼致します。御伝に就ては専門史学の立場からいろいろと疑問もあることですが、上人滅後百年の頃、後伏見上皇の勅命を受けて舜昌が撰したと伝えられる『勅修御伝』（正しくは「法然上人行状画図」に記されているものを主としておきました。お含みをき願います。

合掌

揭示伝道

寝ねざれば夜長く、疲倦すれば道長く、禺なれば生死長し

（法句経）

人死を憎まば、生を愛すべし、存命の喜び日月に楽しまざらんや。

（吉田兼好）

心体光明なれば暗室の中に青天あり、念頭暗昧なれば白日の下に厲氣生す

（菜根譚）

(西)

方に、アミダ仏の在します極楽浄土の存在を信じて、西の京都より東の江戸に帰るのに、西方にお尻を向けては非礼として、馬の鞍を逆さにおいて、西方のアミダ仏に合掌しながら、江戸まで戻ったという、かの熊谷次郎直実の

「行住坐臥、不背西方」

のエピソードがある。当時の人々も、その姿をみて嘲笑したというが、直実は一向平気で馬に逆さに乗って、大声で念仏を唱えてきたのである。

この話を、現代人は聞いて、直ちに素直にこれを信ずるものは少ないであろう。何故なれば、科学を唯一の武器とし、複雑なものの考え方をするのが文化人と錯誤しているかれ等には、純粹にして、素直な信仰をもったものをも、無知扱いをするために、形而上的な問題になると、架空なオトギ話として一笑に付してしまうのである。現代人の悲劇と言わねばならない。

(A)

(方)

位、方角と云う事が未だに存在している事は、大安吉日には結婚式場が満員御礼のフダをかかげるのと同じ事だろうが。

何にも人に嫌らわれる事を無理に押進める事はないが、解釈のしようでどうにでもなる事等は、早く合理化したいものである。

然し人生の方位、方角の決定はそうたやすくは行われない。我々が一寸外出するのに、あっちを廻ろうか、こっちを廻わって行こうかと思案にふけるのとは大いに異なる。

行きつく処は決まっても、途中の人生の方向、と云うよりは目的を決定し、決定したものに進むべき事が肝要だ。何んの職業、地位についても遠くの芝生はきれいに見える例の通り、他人を羨んで、他人のものは良く、きれいに見えるものだでは始まらない。

左右のわき見ばかりでは、前進するか、後退するとか云う以前のもので何んにもならない。

(T)

(極)

道息子が、或る時、長屋の大家さんから支那の二十四孝の話をきいて、「そんなことなら俺にだって出来る」とばかり、酒をくらって裸でねて、一晚中、老母にうちわであおがしたという落語がある。

落語で聞けば誰でも笑うが、案外、これに似たことを、世間の息子共は始終やっているようである。

いや、息子共ばかりでない、立派な一人前の人間が、大真面目でやっていることでも、一段高いところから見ると、あぶなかくて見てられないことが間々ある。仏様の目から見ると、正にそうで、今更乍ら恐縮だが、法華経の三界火宅品のたとえ語にあるとおり、煩悩の炎につつまれながら、一向これに心づかず、遊びたわむれている子供達の姿が吾々なのである。

ミサイルだ、原爆だと、大騒ぎしてる今日の地球を、火星から眺めたらどお思えるだろう。早晚、実感出来るであろうが。

(N)

(楽)

しかるべき修学旅行に出かけて、途中乗っていたバスが転落し、重軽傷を負ったり、不幸にも尊い命を路上の露と消えるといったような悲劇が、頻繁とくり返されている。

事故というものは、天災地変等の避け難い、運命的なものもあるが、おおくは、不注意乃至は、怠慢から起る場合が多い。新聞等をみていると、現代の人々が、何かしらタガがゆるんでいるような気がしてならない。

勿論、失敗は誰れにもあること。しかし一度なされた同じ失敗を、再び保り返すことは愚かと云わねばならない。失敗は怖しいことに違いないが、それより、失敗に心を腐らせて、腐れが腐れをよんでささいな事故をも、大きな事故にまで発展する怖れがあることである。事故を起すことに、

「失敗は成功のもと」

になるよう三省したいものであると同時に、事故を起さない事を心掛けねばならない。

(A)

(世)

の中と云うものは、不思議な齒車によって廻転しているものらしい。何んとか社会運営の絶体的政治原理が望めないものか、出来ればそれは法の手を離れたフリーなもので。と云うと直ぐ個人の良識に待つと云われるかも知れないが。

昔、中国では大洪水を防ぐ者は、偉大な為政者だとされて、天下を取る資格が与えられた。これによって民は安らかな生活が出来たのであろう。

先月二日で我らの代表を選ぶ、選挙も一段落した。

その後日談に、政界進出をねらう創価学会は、次点以下の落選候補者の処を廻わり、学会に入会しなさい。すれば次期当選間違いなしとか、よく云うえは機を見るに敏という事になるが、政治と宗教は本来一諸であるべきではなく、政治のバック・ボーンとして宗教理念を生かすべきもの。

方便以前のものをふりかざして一体何をしようと云うのか、いやはやどうもと云うより他はない。

(T)

(界)

内、界外という言葉が仏教にある。界内随一の智者などいいうと、日本中で一番智慧のある者というふうに使われる。

界というのは「境界」であり、「しきり」である。一定の広さを区切ることである。だから、昔は「界内」といえば、せいぜい日本全土の意味にしかすぎなかったのだが、今日では少々事情がちがって来た。日本だけで事定りた時代はすぎた。いや、世界(地球)だけの時代も終りを告げかけている。「界」は段々に広がって、今や、無限の大宇宙も、人間の「界」の中にとり入れられるようになって来ているのである。

三千大千世界という仏教の言葉も、今日ではもう決して大袈裟な表現ではなくなつて来た。さすがに、お釈迦さまはえらい。三千年の昔に、今日あることを予見されていたのだから。

それにしても、人間の頭の中の「界」はいつになっても狭いままである。困ったことである。

(N)

近代高僧伝

石井大宣伝



僧と仰がれる人も数多あり、今に其の法流はつづき、其の流れを汲む人も多い。

以来めぐまれた環境と粉骨碎身何事もとげざれば止まないという信念のほとばしる所、自然その努力は報いられて弘化二年（一八四五）十月三日三脇席に進んだ時、猛誉勇順の後をついで深川靈巖寺第二十九世となり、安政元年（一八五四）十一月常紫衣の綸旨を賜はり、同三年正月には中興の号が授与せられたのであった。時に鵜飼徹定は

君王新賜^レ紫 咫尺接^二天顔^一

烈日含^レ霞麗 垂虹帶^レ錦殷

臘高竜象裡 名藉摺紳間

為祝^二椿松寿^一 長謡万歳山

の賀章一篇を賦して送って居り、大宣は徹定より十歳も長じていたが、二人は何かと交際し、互に往復してはげましあったという。次いで同五年十月には小石川伝通院に転昇し、文久三年七月十二日故あって一時、其の職を辞したが、明治四年（一八七一）六月再度請はれて伝通院に晋董し、第六十一世の法燈をぐこととなった。時恰かも明治維新の直後

大宣が信濃国上水内郡の犀川に沿って開拓された新開地——川合新田に、松代藩士小山祐治の次男として産声をあげられたのは、文化元年（一八〇四）七月十七日のことであった。今から凡そ百五十年程前のことである。小山家は極めて信仰の厚い家であったから、その一族で出家した人も可成りいたらしく、大宣の出家した動機も、一族から出て安養寺の一代となった承誉のすすめによったものであったという。長ずるに及んで法類のよしみで長らく親懇の情をつづけていた下水鉋の善導寺で剃髪し、笹平正源寺の了玉に師事して得度を受けると共に、膝下にあつて僧侶としての修行をつんでいたが、学問を好み、修行

に専念する大宣の前途に明るい希望をもった師の了玉は、この上は是非共江戸に上らせ、更に宗学の蘊奥を究めさせたいものとの、ひそかな念願を若冠十五歳の大宣の身によせ、文政元年十月六日單身東下させて、増上寺の学寮に入れたのであった。当時の増上寺は、十八檀林の全てがそうであるように、学問修行の場であつて、僧侶を志すものの全てが誰彼を問はず、一度は檀林に入つて、学ばなければならぬ掟になっていた。学寮といつても、谷々に散在する数多の学寮には夫々伝統もあつたが、大宣の学んだ三島谷の竹叢軒は、大玄大僧正の法燈をうける由緒あるもので、ここから輩出した学僧も可成り多く、徳

で、次々と制度が改められ、他面廃仏毀釈の
声は教法滅尽を思はせるばかりの状況を呈
し、人心の動揺もはげしかった中に、師は同
志とはかつて宗風の宣揚に一段の努力をした
のであった。政府が僧侶の肉食妻帯を許し、
托鉢を禁じたのは明治五年のことであり、そ
の年の六月二十二日には大講義に叙せられ、
八月二十四日増上寺に住したが、翌六年正月
神仏合併の大教院が設けられるや、直ちに増
上寺大殿を大教院に献せしめるよう指令して
きたのであった。大宣をはじめ、門末並びに
一山の僧衆はこぞって大教院の設置に反対し
たが聞きいれるところとはならず、二月に入
ると教部省の役人達は本堂に安置されて居っ
た阿弥陀仏を撤去し、代って内陣の中央に天
御中主神・高御産靈神・神産靈神・天照大神
を祀り、山門の前には鳥居を立てる等、頗る
奇妙な光景が境内で見られたということであ
る。しかし大宣は彼の意図に反した企てがな
されながらも、教部省は彼に好意を示して正
月二十八日には権少教正に補し、翌二月廿日
権中教正を授け、更に十月十七日に至って権

大教正となったのであった。時に大宣は七十
歳の老齢に達していたが、その暮もおしま
る十二月三十一日狂人の手により、増上寺の
大殿は炎上してしまった。大宣の悲痛やるせ
なく、早速再建の企てをなしつつあった時、
知恩院では随譽俊光の辞山が伝えられ、翌七
年四月山を下るに及んで、知恩院への入山が
再三すめられたが、大宣は固辞して受けな
かった。例えば知恩院が祖廟というものの、
旧幕時代七百三石の扶持をうけ、臨時の費用
は大檀那徳川將軍がまかなっていたので経営
は容易であった。それが維新を迎え知行がな
くなり、修理雑用の万端を自弁しなければな
らなくなった維新後の疲弊は甚だしく学天滅
後住持は九ヶ月の間欠けて居らなかったとい
う有様であったのに引きかえ、増上寺は可成
り経済的に豊かであった。従って敢て経済的
に苦しい知恩院に住するよりも、増上寺に住
して炎上後の再建に全力をつくしたいという
のが、大宣のいつわらざる念願であった。
同十年十二月五日大教正に進み、翌十一年
三月諸本山が合議して、浄土宗教団の運営は

地理的に見て東西を二分し、夫々に責任者を
おいて統理するのが賢策ではないかというこ
とで、遠江より東を東部、三河より西を西部
として宗政をすべることになり、両者に夫々
管長を置くこととなった。時に東部管長に推
されたのが石井大宣であり、西部管長に補任
を受けたのは鶴飼徹定で、以来拮抗をさけ、
宗門の興隆のために尽瘁したが、在山一年余
にして十二年五月八日老齢を理由に増上寺を
去り、以来竹叢軒にあって念仏三昧に日を送
り、十七年一月二十九日、世寿八十一歳を以
て遷化せられた。臨終にのぞみ、飯沼弘経寺
に住していた石井大順に育英資金制度を設け
ることを遺言し、其の志をついだ大順は遺産
三千円を基金として優れた竹叢軒の流れをも
つ人達の育英の資に充てることになった。弟
子も亦多く弘経寺大順は勿論、東漸寺大康、
筑後善導寺の大慧、芝山内貞松院大充や瑞華
院大信も共に大宣の法流を汲む人達で、明治
の世にあって竹叢軒の教界にあたえた影響は
多大なものがあつたようである。

(大橋 俊雄)

教阿彌陀仏入寂の地

——大盜耳四郎のこと——

北村 謙 順



(写真は、教阿彌陀仏入寂地の碑)

法然上人の門弟中で、異色の人々も多いこ

とながら、教阿彌陀仏は、まことにその最たるものであると申しても、過言ではあるまい。それは、法然上人にめぐり会う迄は、実に、強盜の張本と恐れられ、人を殺し財宝を奪い、人を泣かせた鬼畜の如き強盜殺人の頭目であつたという履歴の持主であつたからである。勅伝の卷二十にも「河内国に天野の四郎とて、強盜の張本なるものありけり。人を殺し財をかすむるを業として世をわたりけるが……」と伝えている人物である。

法然門下には、兼実円証・熊谷蓮生・勢観源智・等々、貴族、武士の出身多く、家柄整いい、才智亦すぐれたるものもあつたが、他面

この教阿彌陀仏や、阿波介、又、高砂の浦に住む漁師老夫婦、そして室の泊りの遊女等、名もなき人々が、化導を蒙り歎喜入信の事実も見落すことは出来ない。

むしろ、ここにこそ浄土門の真価を見ることが出来ると云つてもいいのである。それでこそ大乘究竟の実意が示されたと云えるのである。その中でも教阿彌陀仏は、法然上人の教えの大事な真実を、身を以て我々に示して呉れた人だと思はれるのである。彼は修道勝れた人ではなかつた。学徳を積んだ人でもない。それどころか悪行の限りを尽した、世の人から恐れられ、毛嫌いされ、そして憎まれ、呪はれもしたであろう罪惡人であつた。その人が、法然上人の御化導を頂いて、人間の真実に目覚めることが出来たという事実。そして救はれ度くも到底及び難きこの身にも、摂取してついに捨て玉はぬ仏の御心に泣いて、法然上人に侍し、最後臨終まで専修念仏の余生を立派に送った、この人の示すこの事実である。

ここにこそ「浄土一宗の諸宗にこえ、念仏の一行の諸行にすぐれたるは、万機を撰ずるかたをいふなり」との万機普益、凡入報土の教えの宗教的真實を、本当に示して呉れた人なのである。

この天野四郎の行状入信については、世に大盗耳四郎と称されて、よく知られているのであるが、さて、彼が晩年を何処で過し、どんな往生をとげたかを知る人は、案外少ないと思はれる。私も亦、今迄、無關心のまま度過って来た。然るに、彼が、晩年、知人をたよって、相模国河村に行き、その地に於て大往生を遂げたことを、改めて、勅伝によって気づかされたのである。勅伝には

「無縁のものにて在京かなひがたく侍れば相模国河村と申ところに、あひしりたるもの、侍をたのみてまかりくだり侍り。としたけ侍ぬれば、又見参に入らんこともかたく候」と云って、法然上人に最後の教えを乞うと、「念仏申すものは、かならず往生すしるばかりなり」と申されて、盗み心を例として、真実心の念仏を説かれた。彼は歓喜踊躍し、合掌して師を拝し、おいとまをした。翌

る日法蓮房にも別れの挨拶に行き「このたびの往生は、すこしも疑なきよし、よろこびて東国へ下向しにけり」と、それから後、「教阿弥陀仏、かの河村にくだりてすみ侍けるが、所勞づきて終焉にのぞみけるに、同行にかたりていはく、わが往生は決定なり、これすなはちふかく上人のをしへを信ずるゆへなり。往生のやうかならず上人に参じて申べしと遺言して、正念たがはず合掌みだる事なく、高声念仏數十遍となへてをはりにけり。同行やがて上洛して遺言の次第くはしく上人に申ければ、よく心えたりと見えしが相違せざりける、あはれなる事なりとぞ仰せられける。」と、

これが、教阿弥陀仏の最後を伝へる勅伝の言葉である。この悪行、墮地獄の鬼が、法然上人の教えを最後まで固く信受して、わが往生は決定なり、と大往生を、とげた姿は、堂々、不動、まことに立派であつた。

この終焉の地は、相模国河村であるが、河村は今日「川村」と称し、現在、神奈川県足柄上郡山北町である。実は、これを改めて身近に在ることを知って驚いたのは、私自身であ

つたのである。拙寺は、同郡南足柄町にあつて、山北町は、約一〇軒はなれて北方に在るからである。まことに今迄気づかなかつた自身の不明を恥しく思った次第であるが、今迄に伝へられている説話、伝説等は皆無で地元の人にも知らないのである。そこで何ヶ年か、雲を把むような思いで過ぎたのであるが、努力を続けている中に、山北町教委と郷土史研究会員の飯田義文氏の手がかりで、教阿弥陀仏入寂地」なる碑があることが分つたのである。踊躍歡喜をしたのは私である。ここに亦、法然上人の門弟の一人で然も異色を極めた天野四郎——教阿弥陀仏が、まさしく勅伝の伝へも誤りなく山北町川西二七三（旧清水村川西）字嵐部落に於て入寂されていたことが分つたからである。法然上人の門弟として、神奈川県内に於て入寂された人は、石川禪門、隆寛律師あり、更に又、教阿弥陀仏入寂地山北に在りと分つた喜びは一入のものであつた。

愈々三月九日、実地に、その探訪を試みた。恵まれた好天であつた。暑い位の日で、写真係の木村秀昭君を連れて、二人で山北町山北の関本からバスにゆられて山

北駅（東海道御殿場線）に着き、中川温泉行きのバスに乗って途中で下ろしてもらった処が、嵐入口である。中川温泉と云っても旅館三軒の温泉ではあるが酒匂の上流溪谷に在り、秋の紅葉、春の新緑は美事で閑静黙考の好適地であると聞いてはいるが未だ行ったことがない。

今日は温泉とも云へない大事な目的があるので、ハガキで知らせて貰った略図をたよりに酒匂川を左手に見て山の裾道を歩いて行くと、つり橋が見えて来た。成程、奥に入ったなという感じを覚えた。細い山道へと入って、うねうねと上って行った。山の中段と思はれる辺に、わらぶきの農家が並んで居た。一番上手がお寺だった。真宗西本願寺派（大谷派）真楽寺である。山門の石段の左側に目ざす碑が見えた。幾百年の風雨に打たれ乍らも碑は、待っていたかの如く、春の陽を浴びて暖かく迎えて呉れた。

正面には、太く宗祖聖人御旧蹟、左に願智御坊附法道場、そして右側にまさしく、教阿弥陀仏入寂地と刻まれてあった。

先ず、山門をくぐってお寺に行き案内を乞

うと、有がたいことに住職はおいでだった。本堂に上り御本尊を拝み、そして、住職（長屋晃円師）に来訪の目的を語り、天野四郎——教阿の話をした。住職も驚いていられた。教阿ここに歿して、七百五十余年か。初めは同行もあった。しばらくは人々も語り次いだろう。

けれども、年移り人変り、ついに誰とて語る人もなくて幾歳月。わずかに、その名を碑に止めても、尋ぬる人もなくて今日を迎えた教阿弥陀仏のことを思うと、胸に熱くこみ上げてくる涙を押えることが出来なかった。

先程の碑の前に立って写真をとって振向けば、眼下にひろがる美観。酒匂の清流は帯の如くして山の陰にかくれ、白砂は陽光をうけて、まぶしく、点々たる家々は、静かな午下りに、のどけく立ち並んでいた。見事な眺望のこの山の上から、すでに年老いた教阿が、この景観をながめつつ、時には法然上人を慕い時には京の法の友をなつかしんだことであろうと、しばし七百五十年のその上、在りし日のことを想い浮べて見たのであった。

今は御殿場街道は、足下の谷底を走ってい

扉の御法語

信と行とは車の両輪と同じことで、その何れが重く何れが軽いというものでありません。タイヤにしても太いのも細いのもあり、大きい小さいの区別があるように、人によって信仰の深さが違っているのは止むを得ません。しかしあくまでも両方がつり合っていることが大切で、いい換えるなら、信が深くなれば行もすすみ、行を上げれば信も深くなるということです。

一念十念のお念仏によって往生できると教えてらもうと、心の奥の方で「何んだ、それでよいのか、わけのないことだ」と囁くものがあります。これでは片輪にすぎません。

お念仏は念々に申すもの、寝るにつけ起きにるつけお念仏を申すように教えてもらうと、心の奥の方で「どうもお念仏の十回二十回で往生ができるとは、少々易しすぎると思った。一万遍ならどうか。百万遍ならば大丈夫かな」と囁くものがあります。これは信を置きざりにした行であって何んにもならぬことになります。

そこで上人は、一念十念で往生すること



(真楽寺山門より本堂を望む)

御縁は無碍である。こうして私がここに訪ねることになったのも、念仏の御縁である。法然上人の御縁である。まことに不思議な御縁と云はざるを得ない。住職もこの御縁をよろこんで下さった。

そして今度は、この地方の人々に、この教阿弥陀仏のことを知って貰うために、好機を見て又お話にも参りましょう等とも語り合って、おいとまを告げたのである。

午後の陽ざしは、仲々きつかったが、風が出て木立をゆさぶっていた。山門わきの松の老木が、ざわざわとゆれて我々を見送るように鳴っていた。

(昭和三十四年五月十二日記)

×

×

×

×

るが、昔は、この中段がその道筋に当たっていたのだと住職は教えて呉れた。成程、見ると中段の所々に、昔の街道の名残りを語るかのようには一二軒宛の農家があることが分った。中には茶屋屋敷と今もよんでいる家もあるのか。その道がお寺の門前をまわって走っているのだということも分った次第であった。約二時間も、御邪魔してしまったのである。うか。たとい宗旨の異りはあっても、念仏の

は疑いなしと信仰し、そのお念仏を一生涯を通じて昼夜の区別なくはげみなさいと申されたわけです。扉の御法語に「むまる」とは、西方極楽浄土に往生するということであり、「一形にはげむべし」とは一生涯を通じて励むことであります。

この御法語は「禪勝房に示されける御詞」の中にあります。禪勝房は吉水の御房に上人を訪ね、無智のものの罪深いものが浄土に往生できる旨について教えを乞いました。凡そ百余日上人の許にあつて、八条の問答をされています(勅修伝)

上人は多くの人に対し、それぞれの相手に応じた御詞を与えておられますが、この禪勝房に与えられた御詞には特に一言以て真随を示されたものが多いようです。

お念仏を申すには謙虚にして純真な気持ちでもって、飾る気のないままに申すべきで、「智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し」なる御法語もここにあります。また誰も御承知の「いけば念仏の功つもあり、しなば往生うたがはず。とてもかくても、この身にはおもひわづらふ事ぞなき」も、ここにあります。

かぼちやの花

森 義 正

絵・加藤 金一



遊びます。キャラメルを、やると上手につつま紙をむいてムシヤムシヤたべるのです。

きょうのけいこもすみました
あしたもまたまたここへきて
けいこやあそびをいたしましょう

「せんせい さよなら」

「みなさん さようなら」

「せんせい バイバイ」

子供たちが、帰っていった後、おぼさんが餌をやったり、小屋のそうじをしてくれます。

さるのピンちゃんでした。
赤い、ちゃんちゃんこを着せてもらって園長先生の肩に、またがったり、こども達と、すもうを取ったり、おにごっこをしたりして

梅雨の頃、毎日毎日雨が降り続いて子供達は、ビッチビッチジャップジャップランラン、赤や青のゴム長ぐつで水をはねかえしながら幼稚園に元気よく通って来ました。

こんな時、おさるのピンちゃんは外で遊べない、いいおともだちになって呉れました。
長い雨がやっとやんで、なつかしいお日さまが、キラキラとてらしている朝、てるちゃん、早く幼稚園に行って見ますと

いつも、〃キャツキャツキャツ〃とないて、おむかえしてくれるおさるのピンちゃん
の姿が見えません。

「あらっ、ピンちゃん。どこへ行ったのかしら。おぼちあーん。ピンちゃんは」
と、大きな声で聞きました。

おぼさんは、だまって、てるちゃんの手を引くと、先生たちのお部屋へ連れて行って呉れました。

お部屋へ入ってゆくと、お線香の良いにおいがして、おろうそくの灯が、あかあかとゆらめいていました。
花瓶には、カーネーションやチューリップが活けてあり、その前の机の上には、みかん箱が置いてありました。

園長先生が、さびしそうな顔で静かに
「てるちゃん、ピンちゃんは死んでしまったのよ。」

と、おっしゃいました。

「ピンちゃん。死んじゃったの。どうして。」

「さあ、かぜでも引いたんでしようね、きのうまで、あんなに元気になっていたのに。かわいそうに。てるちゃんも、こっちへ来て、おがんであげてちょうだいね」

てるちゃんは、小さい手を合わせて

「なむあみだぶつ」

と、云っておがみました。

「ありがとう。よくおがんでくれたわね。」

園長先生も、いっしょにおがんでくださいました。そのうちに次から次へとおともだちの太郎君、おさむ君、れい子ちゃん、ゆりちゃん、かおりちゃん達が来て、みんなで、かわい手を合わせて

「なむあみだぶつ」

と、おがんでいます。

幼稚園の裏の、光明寺のおしょう様が来て、おそう式をして下さいました。

おともだちが、手に手にお花を持って光明寺の墓地へ行きました。

墓標には

「ちいさいおともだちのお墓」

と、書いてあります。

それから 毎日のように幼稚園の子供たちが、手にお花やキヤラメルを持っておまいりに来ました。

てるちゃんたちは、

お山のおさるは まりがすき
とんとん まりつきやおどり

出す

と、かわいい声で歌をうたいながら、

“てん てん てん”

と、ピンちゃんのお墓の前で、まりをつきました。ピンち

ゃんは、まりつき歌に、うかれておどりをおどるように思えました。

はじめの間は、こうして毎日おまいりに来ていた子供たちも、いつの間にかおまいりに来なくなっていました。

たのしい夏休みが来ました。てるちゃんたちは、朝の間、幼稚園へ行ってプールへ入っ



て水遊びをしました。赤い水着に赤い水泳帽、水の中で鬼ごっこや、かけっこをして、たのしく遊びました。

遊んでいる間は、すっかり忘れていましたが、おゆうぎ室の前の小さな、

ピンちゃんのおうち

と、書いた、ピンちゃんの赤いおうちを、

見た時、てるちゃんは、すっかり忘れていたピンちゃんの事を思い出しました。となりに居た、

なかよしの れい子ちゃんに

「ねーえ、れいちゃん、ピンちゃんのお墓どうなっているかしら。」

「そうね。わたしすっかり忘れていたわ。幼稚園お休みになってから、一ぺんもおまいりしていいのよ。」

「そーお、わたしもよ。きょう、ようちえんの帰りに光明寺へよって見ましようか。」

「そうそう、うちのおばあちゃん、あしたから、おぼんだっておっしゃってたわ。おぼんになると、なくなった人が帰ってくるんだって……」

「それなら、おさるのピンちゃんもかえってくるかしら」

「そりゃ、おさるさんも、かえってくるわ」

「かえってきたら、いいわねえ」

「それなら、あした、幼稚園から帰ってから、おまいりしようよ。」

「ええ、そうしよう。」

「それなら、おやくそく、げんまん」

二人は、

ゆびきり、かねきり

と、げんまんをしました。

七月十三日、

おむかえ火をたいて、経本に、ごせんぞ様の戒名を書いて、なくなった方をおむかえして生きていらっしゃる頃、好きだったものや、はすの葉っぱの上に、水瓜や、とうもろこしや、なすびや、ほおずきなどを、おそなえしました。

幼稚園から帰った、てるちゃんは、お花やおしい果物や、お菓子を持って光明寺へ、れい子ちゃんとおまいりに行きました。どこのお墓も、きれいにそうじをして、きれいなお花がたてておりました。

「あらっピンちゃんのお墓、どこでしょう」

「どこへ行ってしまったのかしら。無いわ。」

あたり一面、ひめじよおんや、きりん草が、てるちゃんのせいの高さほど、しげっていて、ちいさいおともだちのお墓はさがさな

いと、なかなか判りませんでした。

自然に生えた、かぼちゃのつるが、ぐんぐんと伸びて黄色い花を太陽に向って咲かせていました。

てるちゃんと、れい子ちゃんは、まわりの雑草を、引きぬきました。ひたいに一ぱい汗をかきながら。小さな二人の力では、引きぬけないように、根をはった草もありました。

ピンちゃんのお墓が出て来ました。

てるちゃんと、れい子ちゃんは、かぼちゃのお花だけは引きぬかず、そーっとして置きました。

「おさるのピンちゃんが、かぼちゃにかわる。かぼちゃのピンちゃん」

おさるのピンちゃんは、死んでいなくなっても、何か大きな力が、おさるさんを生かして下さるような気がして、てるちゃんと、れい子ちゃんは、お花と果物とお菓子を お供えすると、小さな手を合わせて

なむ あみだぶつ

と、ちいさなおともだちのお墓の前に頭をさげて立っていました。

(おわり)

初夏の朝は爽々しく晴れて、水々しい緑の風は無意識の裡に心を明るくする。そうした或る日、一日のスケジュールを心に猫き乍ら私は家を出たのだが、踏切迄来ると意地悪そうに垂れ下った遮断機に暫く待たされるのだった。駅はその踏切から百メートル余り、見ると上りの電車は警笛を鳴らして、恰度ホームを出はずれている。

仔犬昇天



安藤 正男

電車が駅を離れ切った頃、一匹の白い犬が軌道に飛び出し、電車と併行して走り出した。危い！近所では余り見かけた事のない犬なのだが……不吉な予感が私の脳裡をかすめる。軌道を横切れば何んでもないものを、何故電車と並んで走るのであらう。然し犬には思考力が無い、併行し乍らその間隔は次第にせばめられて行く。——電車

は再び警笛を鳴らした、然し加速度は益々その隔りを縮めて行くばかりだ。踏切番も、電車の通過を待つ人達も只見守るばかり、軌道外に呼び寄せようとしても誰も犬の名を知らない。十メートル、五メートル、……三メートル、電車は強く警笛を鳴らしたが、然し仔犬は軌道外に避けようともせず、枕木の上を跳ぶように走っている。その私鉄はピークには時速六〇キロ以上も出して飛ばすのだ、必至になって競走したとて何んで仔犬の肢が及ぼう。

犬の行く手に待避線のレールが横たわっていた事は不幸であった。恐らく仔犬はどちらかによける事であらう。右すれば下り線で一応の危機は免がれる。然し若し左すれば、其処には覆い被さるような冷酷な轍が待ち構えているのだ。私の手は汗ばみ、切羽詰ったどうにもならない切なさ胸を締めつけたが、その時転轍のポイントを跳び越す可く、白い影が宙に浮き上ると、後は轟音と震動とが私の眼前を通り過ぎて行った。

朝露に光る枕木に、仔犬は軀を横たえ、

その両肢は虚空に震え、レールには未だ轍の軌りが残っていた。総ては僅か十余秒間の出来事である。

『もしもし、二号踏切ですがね。今の上りで犬が轢れました……』構内電話の受話機をはずすと、踏切番は極めて事務的に事を処理して行く。嗚呼！愚かしい哀れな犬よ、でも犬には「何をどうする」と言った考えがない限り、この愚かしさは不当であらう。

ダイヤ通りに運行する事は事務員に課せられた重大な任務である。然し教秒遅れても、若し徐行してやったなら、犬は元気に今日も猶跳び廻っていたものを。何かやるせないような哀れさと、生きものの儚さとその日一日中私の胸を占めていたが、私は或る本で読んだ犬の因縁話など想い出し、辛くも暗い翳を払い除けようとした。

それは（仏説かどうか知らぬが）要約すると、毛並の白い犬は来世こそ人間に生れ変ると言うのである。仮りにそうだとしたなら、あの仔犬も今頃は呱呱の声をあげ、無辺の慈愛に育まれているであらうか。

仏陀の地

—三—



斎藤 昭俊

サルナートは鹿野苑の名で親まれている。

ペナレスの北方七マイルの地点にあって、ペナレスからゴラリプール線の最初の駅サルナートからは間近にある。最も今の駅は新しいもので、加えて一九五六年に行われたブッタジャヤンテイに改築されて、小じんまりした綺麗な駅になっている。しかし現在では殆んどここを訪れるのにペナレスからリキシャかトンガ(馬がひく二輪のもので、四人のり)、旅行者は自動車で行く。私のいたペナレス・ヒンドユー大学はペナレスの南はずれなのでサルナートまでは八マイルからあるのだが、大学からサルナートまでリキシャで三ルピー(一ルピー七五円)で往復して、向うで一時間

間待たせようが、二時間待たせようが同じである。私は日本人の訪問客がある度にサルナートに往復したので、何回行っているか分らない。

サルナートへの旧道(舗装道路である)には大きな並木が立っている。新道はペナレスの町から非常に近道に出来たのだが、これもブッタ・ジャヤンテイの記念事業になったわけで、途中のバルナ河にかかっている橋も改築された。サルナートの近くになると並木や立木の上にあのサルナートのシンボルである塔(ダメーク・ストユーパ)が見える。ストユーパを間近に望む辺りから左に折れていよいよサルナートである。

サルナートの一番手前にあるのはチョウカ
ンジ・ストユーパで五比丘奉迎塔と云われて
いるもの。これはこの塔のために築かれた丘
の上に六角の塔が立っている。釈尊とともに
苦行をしていた同志で、釈尊が六年の苦行を
投げうって独自のニルバーナへの道を歩まれ
たのを見て、これらの同志は釈尊は苦行に堪
えかねて行を捨てた弱き者だとのしり、偶
々釈尊がブッタ・ガヤの菩提樹の下で成道を
得て、はてこの悟りを人に説いたらしいもの



サルナートの博物館

(昔お釈迦様が最初のお説教をされた処)

かを思い惑いながらサルナートにやって来た。

このサルナートで苦行を積んでいた五人は釈尊のやってくるのを見て、脱落者がやってくるよ、知らん振りしてしようじゃないかと衆議一致していたが、釈尊が次第に近づいて来ると、自然に座を立てて迎え敬礼したというところがこの塔の場所だという。

この塔を左にして更に少々行くと、サルナート博物館がある。右手に広い庭をもった平



ア シ ョ カ 王 柱 頭

屋ビルディングがそれで、鍵の手に左右対象の建物であるが、中央正面の部屋にはここで最も有名なアシヨカ王の柱頭が正面にかざられてある。この柱頭はこのサルナートから出たもので赤砂岩のつるつるに磨きのかかったもの、アシヨカ王柱は一つの石で作られているのだから更に驚きであるが、この柱頭は中でも有名で、四つの獅子頭をかたどったもので、現在インド中央政府のマークとなっている。この中央ホールにもう一つ有名なものがある。それは初転法輪像である。この像は向って右手に安置されてあるが、目を閉じているかの如く、いまにも笑い出すような、しかも柔和な、ふっくらとしてお顔、一般にグプタ朝の作品はそうしたものが多く、私が一番好きなものであるが、初転法輪のお顔は何とも云へないふくよかさである。この像の写真は大分出ているからお目にかかれると思う。この中央ホールから右手に続いてグプタ朝、中世、左手の部屋はベナレス出土のものを陳列している。ベナレス出土は全部ヒンドゥー関係のものばかりである。

博物館を出て右へ突当たるとグプタ朝にあっ

た僧院の跡である。手前が第一と呼ばれているもの、向う側が第二と云われている。僧院と本堂、供養塔の跡がはっきりと残されている。煉瓦で積まれたそれらの跡の他は緑の芝生なので寂しさが味わわれない。第一ルインの本堂から前面にダメーク・ストユールパ、すぐ後がアシヨカ王柱のあったところとなっている。アシヨカ王柱は切られて三つ四つになっている。この柱にアシヨカ文字で何か書いてある。

前面にあるダメーク・ストユールパは円筒形の二段式になったもので、石で築かれている。基礎はアシヨカ王によって作られたという。その上に段々と積み上げたという。外面の壁石には彫刻がほどこされていて、今でも幾つか残っている。蓮の花や卍の模様が図案化されている。この塔の中に何か入っているだろうというので昔真中を掘り下げていったそうだが、何もなかったということである。このストユールパはマウリヤ王朝からグプタにかけて作られたものとなっている。

このストユールパの右手に大菩提協会で建てた寺がある。別名チャパニーズ・テンプル。

精進の結果

経函にお経が納つた話

聖武天皇の御代のことですが、山代の国相楽郡と言う処、即ち現在の京都府相楽郡に、非常に信仰心の厚い人が居りまして、四恩、つまり天地、国王、父母、衆生の恩に報いようと法華経の写経を致す事にしました。その写経が出来上りましたので、彼は大切な写経だから一つ立派な函に納めて置こうと考え、その函の材料として南方でとれる白檀紫檀の木を方々探し求め、やっとの事で奈良で見つけ当時の錢百貫で買い求めました。そこで早速細工人に寸法を計らせて経函を造らせましたが、どうしたところか大工が寸法を間違えた為経函が小さくどうしても写経が中に入りません。そこで彼は再び白檀紫檀の材料を探しに行きましたがもう何処にもありません。困りぬいた彼は誓願を發し多くの僧侶を招き呼んで法華経に依って法要を致し、自らは二十一日間仏前に罪過を懺悔して、再び白檀紫檀の

材料が見付かる様にと仏様をお願いし続けました。それから二週間経った日、彼は試みに写経をもう一度経函に納めて見ようと致しましたら、どうした事でしようか、経函が少し伸びたのか写経が小さくなったのかもうちょっとの処で写経が中に入れそうではありませんか。そこで比の信心深い人は増々精進に精進を重ねざんげして、それから一週間後、即ち成満の日に写経を経函に納め様と試みますと、誠に不思議、その函に写経がぴったりと納まってしまいました。余りに不思議なのでこれは経が短まったのか函が伸びたのかと思ひ写した経ともとの経をとって比較してみました。両方全く同じ寸法で相違がありませんでした。これはきっと写経が不思議な力を示し、写経を行った人の信心の深さの度合を試みたものでございましょう。精進が如何に大切かを物語るお話でございます。

Y・S記

しかし日本でたてたわけではなく、日本では内壁の壁画を野司香雪画伯が三年がかりで画いた釈尊一代記がある。今年の日本政府のブッダ・ジャヤンティにはこの住職が招かれて来日した。入口には大日本仏教会で贈った小さな釣鐘があつてこれも人気の的になっている。この寺の後側が鹿野苑の故事にちなんで鹿を飼っている。この寺の前にはダマルナード（無料宿泊所）がビルラによって建てられてある。この先には中国寺がある。そしてその先にはヒンドユー寺があり、ダメーク・ストゥーパのすぐ隣りにはジャイナ寺がある。

このサルナートの管理は中央政府がやっていて、考古学局がそれに当たっている。大菩提協会ではサルナートに小学校、中学校、高等学校をもっていて教育の任にもあたっている。インドで最も仏教の地らしい処はやはり仏跡であるが、中でもサルナート・ブッダ・ガヤがあげられる。

×

×

×

×

入信の機

一

日本晴の天空に、くっきりとそびえ立っている富士山をバックとして、武蔵野名物の雑木林は、うちつついている。その若葉越しに薫風は、心持よく野づらを撫でていた。

今を時めく下野の豪族宇都宮弥三郎頼綱は、血気の若殿輩を従えて、談笑しながら行列をうたせていたのである。

伴もない熊谷蓮生法師は、はからずも路上で行きあったのであった。

先方は、熊谷とは知る由もなかったが、熊谷の方では、早くも頼綱とみとめて、あじろ笠をあげて、

「やあ、めづらしや」

と声をかけたのである。

聞えた筈の頼綱は、顔をそむけて行きすぎようとした。

併しかつては、戦友であり親交のあった兩人である。彼は、

「この卑怯者奴」

と、ふりかへりざま叫んだのであった。

「熊谷は、それを聞いて莞爾として、どうも、仰々しい、余りにも大勢ではない

か、誠に驚いたものである。

伴の者は、いかに多くとも、一度無常の殺鬼がおしよせたならば、防ぎよがあるまい。

阿弥陀如来の本願は、念仏する者は、必ず迎えとり一人でも地獄には落さないぞ、一人当千の豪の者にも、尚まさりにまさるは、これ念仏である。必ずともお念仏を申し玉へ」

と、叫んで行きすぎたのであった。

このことについて、勅修御伝には、宇都宮の弥三郎頼綱、家子郎従済々として、武蔵野を過けるに、熊谷の入道行あいて（云云）としてゐる。

二

世に、順逆無二の門ということがある。

とりようによつては、順も亦逆となり、逆も亦順となることがある。

その後の宇都宮と熊谷との関係について、勅修御伝に、

頼綱、後念仏往生に心をかけて、大番勤仕のために、上洛したりける、ついでに、承元二年十一月八日、上人（円光大師）の勝尾の草庵にたづね参じて、念仏

往生の法門、御教訓をかうぶる（云云）と、武蔵野の一件が頼綱の入信の動機発端

となつてゐることを伝えている。

かの時の熊谷の態度は、実に美事であつた。

頼綱が、大師を摂州勝尾寺に徒訪したのは、大師が讃岐から神崎港を経て、勝尾寺西の谷に紫の庵を結んで仮住居されてから丁度一ヶ年目であつた。旧の十一月八日は寒中である、霜どけ酷寒の中を、山道丈でも二里余りを登山されたことは、尋常一様の決心では出来るものではない。武蔵野における熊谷の堂々たる態度、感情に走らず死生一如のたんたんたる有様が深く頼綱の印象にあつたからである。大師上人が頼綱にこんとくなる教化をせられてからその終りに當つて、

わどのの心ぞ、一向に念仏せば、往生疑ひなし

と、仰せられてゐる。機根が熟している、立派な信根であると保証された言葉である。彼も又、

大師の御ことば、耳に留りて覚ける、後一向専修の行者に、なりにけりと、伝えられる。実信房蓮生として正元元年十一月十二日正念往生している。

（村上博了）

眞理の花たば

——若き女性への仏教入門(四)——



佐藤良智

正しきもの

(その二)

端正にして大地を歩む女性。知性に輝く瞳がみつめるもの。それは眞理である。眞理をみつめる瞳は澄んでいる。それが近代女性の特色である。

眞理は眞実をみるものに輝く。世尊、仏陀は常に申された。ありのままに眞実をみよと。

人生のもろもろの、くるしみをわれわれは、みつめた。このくるしみは、どこからくるのか、世尊は明快である。

こころの迷い——それが苦しみの源であると。今日迷い、あす迷い、あしたに迷い、昼迷い、夕べに迷う。迷いに迷ってはてしがない。人のこころの、わずらい、悩みは数えくれ

ば一〇八もあるという。かぎりが無いという意味だ。

こころの迷い、暗さが、われわれの行為を定める。行為が、ことばが汚る。汚った行い、汚ったことばが、どのように自らを汚らせ、他を汚らせるか。

美わしい自然の妙景を、五月の緑の園をけがすものは誰か。絢爛の花ぞのをけがすものはたれであるか。

人生は苦であるとさけばざるを得ないようにするものはたれか。なんであるか。

こころのけがれである。こころのけがれから生れる行為である。ことばである。

世尊、仏陀は、ためらいなく申される。

“すべては、こころによっている、

ところが主であり

ところからなりたっている、

人がけがれたところでかたり

人がけがれたところで行う時は

あだかも

車がひく人に従うように

くるしみが、あとから従う”

くるしみはけがれたところから

くるしみはけがれたことばかり

くるしみはけがれた行いから

それが美しい人の世の、紅の花ぞのをそこなう。

あまりにも平明であるが、世尊、仏陀の説き給う真実である。

人の世の人の苦しみと、その根源とがここに明らかにされた。

この二つながらのないせかい。

それがあこがれの緑の園である。

それがあこがれの紅の園である。

静かで

淨らかで

生き生きとした

生命の真実の河。

洋々と流れるけがれの無い生命の河。

ね、は、んとよばれる生命の河。

”無明（むみよう）とよばれる暗き雲に覆われない、あかねさす朝日のごとき光りに照りはう生命の河。

永遠に尽きることのない生命の河。

さて、

この河に行く道がなければならぬ。

世尊、仏陀は、リンデン菩提樹のもとで道を成ぜられた。

この生命の河に文字通り一体となり給うた。これを道を成ずるといふ。天地宇宙を通じて唯一なる道、即ち純一無雑なる永遠の道、この道こそ、ね、は、んと言われる無限の生命の河である。

このあこがれのみ国に通ずるものが中道である。単なる道ではない。

ここも、ものも、すべてのものをうちにつつま、そのところを得せしめ、永遠なる生命の河に帰せしめる道である。

道。

道。

中なる道。

相對をうちにつつむ絶對の道。

生き生きした中なる道こそ。

永遠なる生命の河の本質だ。

世尊、仏陀は、道を成ぜられた後、麗わしの園、鹿野苑において初めて真理を説き示された。初転法輪とよびならわしている。

むかし、輪、たとえば、インドの国の武器であった。戦車ともいうべきもの。この輪という武器をもって国を征服して王者となるのが、この国の人の理想であった。しかし、世尊、仏陀は、法輪、すなわち、真理の輪をもって国を覆い給うた。いな、世界に真理の花たばをつみ散じ給うた。偉なるかな。

八つの聖なる道。正しき道。

これこそ、その時の、初転法輪である。この道は、後世、仏者の深き哲理に通づるものとなった。尊い道である。

正しく見る

歡知にかがやく、若人のひとみ。真理をみきわめずにはいない清純なるまなこ。

よきこと

あしきこと、

邪なるもの

正しきもの

それらが生涯を通じてみきわめることができるものに幸あれ。いのちかがやかん。

正しき思い。

こころのなかには、他の人にはみえない。しかし、われわれの思いの何と汚れているものであろう。よこしまの思いに、邪の欲望に、もえていることであらう。常に正しき思いをすみかとする。何とすがすがしく気高いことであらう。世尊、仏陀は常に正しき思いを尊ばれた。

正しいことば。

正しいことばは、正しい思いから湧き出でる。正しいことばは美しい。美しいことばは、人を美しくする。ことばは本来道に通ずるものなのだ。みだりがましい言葉、両舌、人をまどわすことばなどなど。皆道に通じはしない。正しい美しいことばのみが高き道に通じるのである。

正しきわざ。

行為はこころの窓だ。こころ正しければ行為が正しい。われわれは、一日としてなりわいを離れては生存ができない。うしろめたさのないくらし。まっとうなくらし。美しいくらし。美しいくらしはたのしい。同時に、たのしいくらしは美しい。地上のありとあらゆるひとびとが、正しい、美しいくらしがおくれること、人類の高き願いだ。世尊、仏陀の願いでもある。

正しいのち。

命が正しくなかったらすべては空しい。いきとし生けれるもののいち、なべて尊い。唯、尊きいのちを正しさにおくもの必ずしも多くはない。われわれはうちにかえりみてはずかしい。

はつらつとした若きひと、そのいのちをいとおしみつつ、正しさにあることを怠ってはならない。世尊、仏陀はきびしく申されるのである。

正しき精進努力。

精進のすがたほど美わしいものはない。それが、小さい仕事であろうと、大きな仕事であろうと、せい一杯働いているすがたほど尊く、美わしいものがまたとあろうか。世尊は、精進を讃えられた。正しい精進がこよなく尊いものであることをたたえられた。精進は創造のかぎである。仕合せへの道

だ。いな、精進し得るものは仕合せなのだ。正しい精進がねはんへの道。

正しい念。

精進は正しい念によって貫ぬかれていなければならない。空しい精進ほどあわれなものはない。

こころ沈まず

こころたかぶらず

平静な貫かれたこころ。道に通ずる心。

正しい一心。

一心不乱ということばがある。仏者のことばである。こよなく尊いことばである。ことばを離れたことばだ。

ここまでこなければ生命の大業は成就しない。

永劫のいのちの世界にわけいる最後のてだてである。一心不乱。何という魅力的なことばだろう。心境であろう。この一心が八つの道をドッシリと貫いているのである。ことばを離れ、身をもってよみとる境地である。

世尊、仏陀は、この八つの道を説き示して

静かに鹿野の苑を離れられた。

しかし、

この道は今もわれわれのいのちとなって、かたときも離れない。

(大正大学教授)

浄土歌壇

山形野々々代選



天

東京 二宮 綾子
竹藪をうしろに石のみ仏は掌合せ
たまふ山に向ひて

評

誰が刻んだかわからぬ野べ
の仏であるが背景が清らか
であるため見る作者の心にも
謙虚と清浄の心が漂って
いるしづかな落ついた作で
ある。

地

東京 平川 梅路
誰が眼にも今はかくせぬ不幸てふ
背の烙印の上に花散る

評

桜の花の下を歩いてる作者
の後姿はわびしく寂しい。
誰がみても不幸な生活を送
っていると一目でわかるだ
ろうと自嘲しているようだ
ある。

人

東京 牧尾有希子
ひと函のチーズが放つ明るさを冷
えし指もて皿に並べぬ

評

日常の何でもないしぐさが
ふと心を明るく転回させる
ことを、うまく歌いこなし
ている。チーズの明るい黄
色、それを皿に並べるとい
う単純な仕事で、気持が仄
々と救はれている。作者は
それまで何か心が沈んでい
たのだろう。『冷えし指』
の句がそれを表明してい
る。

神奈川 中里 文子
ポストには楽しき便りに打ち交じ
り青年囚の文もありけり
藤沢 熊坂 満
僧形の老婆靴はき歩道ゆく愛憎す
でに離れおはると
大阪 清水 幸治
生きて行く望み失へる子の心とら
へ得ざりし母の嘆きや

兵庫 岸部かずえ
父逝きしかなしみ云はず働きて我
ら育てし母老いましぬ

川内市 串岡 君江
げんげ草すみれ残して草ひきぬ父
母ねむりますおくつきに来て

鹿児島 児島登喜子
それぞれに成長したるよき子持つ
父安らかに寿を保ちませ

和歌山 中川 誠一
麦青む霧の大和路月が瀬へ古き夢
のせ我が汽車は行く

福岡 吉末 真竜
朝またき落葉たく火に背を温め芦
の湖上の逆さ富士見る

大津市 石畠 俊徳
ふるさとに母も汲みつつ育ちけん
噴井の水を我れも味はふ

東京 山崎 晴子
白梅はほころび初めて早春のみ寺
清らに寛こぼるる

青森 向井 きつ
姉一人ランプの下にすすり泣く幼
かりにし遠き日のこと

鹿児島 長崎 恒子
疑はず氷野に犬を生かしめし同じ
力に護らるるわれ

岡山 高路ひろみ
浅はかに吐きしことばのただひと
つ今も残りぬ桜ちる宵

東京 波川 敬子
沈丁花かたき蕾もふくらみて静け
き庭に春の来れり

東京 張山はるみ
み心にそむきし我れの誕生日祝ひ
てかくも小包のつく

東京 石谷てい子
罷業すめば父上京と便りあり母子
はニュースを熱心にきく

東京 菊地 美夫
嫁ぐ娘の後姿に見入る我れ嬉しさ
につぐ淋しさの湧く

富山 水野その子
夜のとり比叡を包むころとなり
寂しくきこゆ三井寺の鐘

福岡 吉末 林堂
東宮の四月十日の成婚を待ちかね
てあり牡丹蕾みて

高岡 星野 民
聞え居し外の雪のおひおひに間遠
となれり大寒の夜

高岡 五歩一信子
つららより落る雪のうつくしく薄
紫の傘の上に散る

富山 山本 保子
喜びも愁ひも共に分ちつつ歩み来
し今は長し短かし

×

×

特別寄附名御芳名（順不同）

一金壹万貳千円也	榮立院	福西賢兆様
一金叁万円也	野村法衣店	"
一金壹万円也	常照院	野村宗春"
一金貳万円也	竜原寺	前田成孝"
一金貳万円也	天陽院	笠原秀定"
一金貳万円也	松蓮社	樹下信雄"
一金貳万円也	済海寺	久家惺道"
一金叁万円也	心光院	戸松学瑛"
一金叁万円也		松本徳明"
一金壹万円也	大松寺	酒井密成"
一金壹万円也	清岸寺	吉田弁空"
一金壹万円也	常光寺	大谷隆雄"
一金貳万円也	法禪寺	漆一雄"

新規会員登録

東京	宮田誠道様
"	桜庭俊海"
新潟	菅原憲雄"

山形	長野									青森	埼玉	京都	長野	秋田	福島	北海道	群馬	北海道	神奈川	東京	
金城寺様	横沢 弥寿太郎	酒井 数良	金井 栄三郎	斎藤 利治	横島 将利	片岡 俊雄	大矢 きく	中野 こう	宝隆寺	光台寺	青龍寺	大龍寺	榎田 みね	宮脇 ときえ	善導寺	北川 文彬	大徳寺	正運寺	大休寺	吉村 芳蔵	白蓮会

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一力年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土 七月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年六月廿五日 印刷

昭和三十四年七月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

東京高等保育学校長
駒沢大学教授
日本童話協会理事長
内山憲尚先生の二名著

お母さまの童話

B 6 判・二四〇頁
定価二五〇円・千三〇円

◇ママ、お話をしよう……とせがまれませんか？
そんな時に、この本一冊あれば、すぐ話せます。
◇幼稚園・保育園の、三年保育や年少組のお話に、
お困りありませんか？ 本書はそれを解決しま
す。

仏教保育二十章

B 6 判・一九五頁
定価一八〇円・千二四円

◇単なる保育と仏教保育とはどう違うか。この仏教
保育の特色が如何に大切であるか……これを簡明
にまとめ、現行うべき課程や必要な法規をつけ
加えた、仏教保育を行うための最良の手引き書。

東京都中央区京橋二ノ一（塩山ビル）
発行所 青山書院

電話京橋（E6）〇七五四
五四九二
振替東京九九三〇三番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和三十四年六月二十五日印刷 昭和三十四年七月一日発行

浄土

第二十五卷

第七号

定価金五拾円（送料）

惻々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

お盆の施本

甦えるいのち

A 五版・二十七頁
定価三十円千八円

20部以上・5分引
50部以上・1割引
100部以上・2割引

お盆は人の心が仏教を志向します
このチャンスに充分に活用して下さい
それには本会発行のトラクトを

信仰への導き 佐藤賢順著 定価十五円

仏教入門 竹中信常著 定価二十円

送各八円